

# STAY OR GO

2007.5.9 発行 mail:stay\_or\_go1989@yahoo.co.jp

# SUMIKO

## PICK UP ARTIST : 赤靴 (丸山 和弘)



### 2007. 2. 25 横浜 BAYSIS

2007年2月3日。5年間の活動に終止符を打ったBOWL。  
BOWLのVoだった丸山は、同月の25日赤靴というクレジットで横浜BAYSISのステージに立っていた。

赤靴とは、丸山がBOWL加入以前の10代の頃から地元新潟で弾き語りをしてきた時のクレジット(当時まひらがな表記)。

この歩みを速いと捉えるか、遅いと捉えるかは人それぞれだろう。  
けれど、バンドが終止符を打つ事で、発展を続けていた丸山自身の音楽の旅が途切れてしまうのは惜しいと感じていた者としては、このリスタートは自然な流れであった。

ギターと譜面台を持って現れた丸山に緊張や気負いは感じなかった。  
BOWL時代に作った曲や新曲を交え全5曲。最後の曲は19歳の時から大切に歌い続けている「季節日記」。ギター一本と声だけで表現される歌たちはどれも瑞々しくて温かくて、心地よかった。

窮屈さを感じる強気な歌や肩が凝るような歌はなく、日常の何気ない出来事から感じる心の呟きを言葉に綴っていく。  
それが丸山の世界。

丸山の伸びやかな歌声を余すことなく聴ける贅沢感に浸りながら、彼が歌と距離をとる意味なんて全く見つけられない事を改めて知る結果になった。

丸山の足元は、足に馴染んだ履きなれた赤い靴。  
履きなれた靴での始まり、赤靴という名前、今日歌われた曲。どこをとっても赤靴としての初ステージは、丸山が、あかぐつとして活動を始めた日から、なみなみと続く彼自身の音楽の旅の一過程の印象が強かった。

小さい頃に読んだ、一度履いたら永遠に踊りだすという魔力を秘めたアンデルセン童話の「赤い靴」。それを題材にして魔力に魅せられた女の子が靴に足を通すと死ぬまで踊り続けたというパレエ映画の名作「赤い靴」。主人公

が情熱を傾けた踊りへの思いを歌に置き換えれば、丸山に通ずるものばかり。「家にある靴が全部赤い靴」という丸山。あかぐつとして歌い始めたあの日より今、歌への思いは確かなものに形づいているはずだ。それにしても、赤靴としての始まりが童話の「赤い靴」のゆかりの地、横浜からというのがホントにニクいなあって思ってしまう。

### 2007. 3. 16 新宿 MARZ

音楽の原点って何？歌の原点って何だろう？  
楽しい。拍子と節をつけて言葉をだすもの。僕の思っていることを君に伝えたい。聴いている人と思いや感覚を共有したい。エネルギーをあたえるもの。心を解放させるもの、自由・・・etc.

音楽の決まりごとよりも自身の感覚を優先させて歌う彼の歌は、ギターさえいらぬのでは？と思わせるぐらいの歌の力がある。声の魅力がある。聴き手を選ばないし、場所を選ばない。作為的なことが一切ない。

丸山の感情に合わせてうたを発して、音をつけていく。  
極端なことを言えば自分の感情のひろがりにつけて自分の伸ばしたい所で、いくらでも声を伸ばし感情をのせる事ができる。その事が丸山を解放させる。ありのままの歌。丸山のむき出しのソウル。それが存在するだけで妙。

丸山は丸山として確固たるうたうたい。だけど同時に何者にもなり得る。LIVEHOUSEで歌っている丸山の背のどんちようが上がったら、ドラえものの四次元ポケットが存在するような気さえる。歓びや悲しみを歌にするサウンド・オブ・ミュージックの世界が広がる。そこには何のギミックも存在しない。

仮想敵がなかったら、自分の実体が見えないような今の日本において、丸山は稀有なのではないか？

暑苦しい燃えるようなモチベーションが前面に出るのではなく、それでいて魅力があるって凄くない？

音楽の初期衝動に忠実になっている事が、いかにユニーク(唯一)である事か!!音楽に忠実ってことは、どれだけ純粹で、音楽を愛しているか。余計なものに、まみれていないかってこと。

色々なものにまみれすぎてしまっている今の時代、NAKEDであることは至難の業だ。自由を歌う音楽の中でさえ NAKED な音楽に出会う事はめったにない。それだけ貴重なのだ。

それを、歌のうまい丸山が惜しげもなく明け透けに聴かせてくれる。こんな贅沢ってない。

フォークって感じでもないし、ロックって言葉だけじゃ足りないし、ソウルも近いけど・・・彼の肉声をカテゴライズしようにも出来ない。色々なものから解放された名づけようもない音楽。歌の原点。

これぞ NAKEDMUSIC!!

本当の NAKEDMUSIC を知りたいのなら、足を運ぶしかない。

今、流れ出ている歌だから、今!を逃さず聴いて欲しい。

そしてゲストギタリストを迎えたり、バンドでの活動を念頭においているという今後の活動も興味深い。

## LIVE: RADWIMPS 2007.4.7 横浜 BLITZ

「勢いがあるのに、涙が溢れそうになっちゃうのはなんでなんだろうね」

RADWIMPS との出会いはそんな感情から始まった。

歌詞がいい!とか曲がいい!とか以上に、ただただ、心をワシ掴みにさせってしまった。

繊細で、ロマンチストで、弱ちくて、神経質で、高慢ちきで、自暴自棄で、生真面目で、くだらないくらいアホで、ちょっぴり意地悪で、憎めなくて真面目ってより、純粹ってより正直って言葉がしっくりきて、へたれで。それを知っているからこそ、あつたかくて。そんな LIVE だった。

この日 LIVE の中盤、「セプテンバーさん」からゲストギタリストとして河口修二が参加した。

河口のギターもまた、私にとっては、涙が溢れてしまう音色。

彼のあたたかみのある音色の中に、生きるという事を真摯に受け止めた人間が持つ優しさや強さ、厳しさを感じるからだ。

「セプテンバーさん」で桑原の繊細で清らかなギターに河口の温かく力強いジャジャ、ジャジャというギターがからんだ時の嬉しさはこの事が自分の中でリンクしたからに違いない。

この空気感でもっと RADWIMPS と河口修二の奏でる音楽を聴いていたと思ったのも! 河口修二のギターはこの部分で RADWIMPS の音楽とリンクするものであった。

洋次郎(VO,作詞)の真摯に向き合う姿勢と、河口のギターの音色に感じるものは近い。

だから、「しゅうちゃんこう見えて 30歳なんです。」

って洋次郎が MC で言った時(メンバーは 22 歳って事もあってか?)会場はどよめいた。だけど、その部分でしっくりきていた私は次の TOUR でもこの形で表現出来る物があつたらいいなあと思いを馳せていた。

河口がサポートミュージシャンではなく、ゲストギタリスト(彼用のマイクがフロントの 3 人のメンバーと同系列上に置かれた)として、迎えられた事は、少なくともその事にメンバーがリスペクトしている由縁なのだろう。

RADWIMPS 素敵!

RADWIMPS(ラッドウインプス)とは、

カッコいい弱虫。見事な意気地なし。マジスゲーびびり野郎。

(公式 HP より) って意味。こんな魅力的な事ってないと思う。

## CD: 「処方箋」 処方箋

2006 年 11 月 18 日下北沢 BAISYBAR。

Vo.G)加藤雅之 Ba.)安野隆司 Ba.)小穴雅仁Dr.河野道仁からなる処方箋が始動した。

「ツインギターってよくあるけど、ツインベースって何?」が第一印象だった。ベースの腕前に絶大な定評のある安野。ただ、ベースを弾くだけでも、最前列に詰め掛けている男達を「すごいな」と唸らせる事はできるはずだ。しかし、処方箋で彼は新しい試みをしている。それは、挑戦といってもいいだろう。メロディをベースで奏でるのである。この挑戦は安野だけの挑戦では決してなく、処方箋 4 人の挑戦。LIVE 前「え?どういこと?」問いかけたかった思いを、LIVE 後「へ〜すごいものみた」に変えるこの 4 人はきっと、ただものじゃない。

そんな処方箋が 3 月 25 日の DAISYBAR より初音源を発売。

ジャケットの仲村容保(Hydrop)のイラストが音源とピッタリで拍手をしてしまったほど。



心臓の血管から林檎の木が生えている。音源聴くと 林檎の木どころじゃない、もっと凄いの生命吹き込む感じがある。

枯れかけている草花ばかり、枯れかけた魂に、みなぎる生命吹き込む感じ。映像的に言うと ゴーストタウンが生氣を取り戻していくような。Vo の加藤はバンド名の由来について「自分自身が処方箋欲しいくらいだった」とインタビュー(次号掲載)で話していたが、それは、聴き手側にも言える事ではないか?これだ!って音楽やバンドに出会えなくて 放浪しちゃって、枯渇しちゃってた人は少なくないはず。

船に寝転んで林檎をかじっているのは加藤で、加藤は自分で自分の求める音楽(処方箋)を見つけ、その音楽に乗って、みんなより一足先に自分の描く場所に漕ぎ出している。

搾り出されたマスタードは、見せかけは関係ない人にはマスタードなのだけど、求めていた人には処方箋の音楽。

加藤が遅れて、その音楽に触れた人やものが生氣を吹き返していく。それが人知れず満月の夕べなのがいいよね!

この世界にトリップしたい人は4曲入り1000円の DVD ケース入り処方箋 CD を LIVE 会場でお求め下さい。

でも、一番は、LIVE 会場で処方されるのが一番効き目があります。

《NEXTLIVE》 赤靴: 5.18 (FRI) 新横浜 BELLS  
<http://akagutsu.com> (PC・携帯対応)

処方箋: 5.19 (SAT) 下北沢 daisy Bar  
6.30 (SUN) 渋谷 DESEO